

1.	イソプロピルアンチピリンは、解熱及び鎮痛の作用は比較的強いが、抗炎症作用は弱い。
2.	解熱鎮痛薬は、発熱や痛みの原因となっている病気や外傷を根本的に治すものではない。
3.	カフェインは腎臓におけるカリウム（同時に水分）の再吸収抑制作用があり、尿量の増加（利尿）をもたらす。
4.	次硝酸ビスマスは、牛乳にアレルギーがある人では使用を避ける必要がある。
5.	小児及び若年者では、抗ヒスタミン成分により眠気とは反対の神経過敏や中枢興奮などが現れることがある。
6.	センソが配合された錠剤は、効果を高めるために口中で噛み砕いて服用する必要がある。
7.	リボフラビンの摂取によって尿が黄色くなることがあるが、使用の中止を要する副作用等の異常ではない。
8.	血の道症とは、臓器・組織の形態的異常があり、抑うつや寝つきが悪くなる、神経質、集中力の低下等の精神神経症状が現れる病態のことである。
9.	アレルゲン（抗原）が皮膚や粘膜から体内に入り込むと、その物質を特異的に認識した免疫グロブリン（抗体）によって肥満細胞が刺激され、ヒスタミンやプロスタグランジン等の物質が遊離する。
10.	メクリジン塩酸塩は、他の抗ヒスタミン成分と比べて作用が現れるのが速く持続時間が短い。
11.	月経周期には、視床下部や下垂体で産生されるホルモンと、卵巣で産生される女性ホルモンが関与する。
12.	点眼薬1滴の薬液の量は約50 μ Lであるのに対して、結膜嚢の容積は30 μ L程度とされている。
13.	アラントインは、局所麻酔成分であり、痛みや痒みを和らげることを目的として配合されている。
14.	ステロイド性抗炎症成分は、末梢組織の免疫機能を上昇させる作用を示す。
15.	高コレステロール改善薬は、一般に痩身効果を目的とする医薬品でもある。
16.	カルバゾクロムは、歯肉溝での細菌の繁殖を抑えることを期待して配合されている。
17.	漢方処方製剤は、用法用量において適用年齢の下限が設けられていない場合であっても、生後3ヶ月未満の乳児には使用しないこととされている。
18.	通常、尿は弱酸性である。
19.	クレゾール石ケン液は、結核菌を含む一般細菌類、真菌類、ウイルス全般に対して殺菌消毒作用を示す。
20.	一般用医薬品の点眼薬には、緑内障の症状を改善できるものがある。
21.	妊娠検査薬は、尿中のヒト絨毛性性腺刺激ホルモン（hCG）の有無を調べるものである。
22.	かぜ薬は、ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から除去するものではなく、咳で眠れなかったり、発熱で体力を消耗しそうなときなどに、それら諸症状の緩和を図る対症療法薬である。
23.	ビタミンA主薬製剤は、骨歯の発育不良、くる病の予防に用いられる。
24.	解熱鎮痛成分の鎮痛作用を補助する目的で配合されているプロモバレリル尿素には、依存性があることに留意する必要がある。
25.	頭痛の発症とその程度には、頭痛が起こるのでないかという不安感も含め、心理的な影響が大きいため、解熱鎮痛薬は、頭痛の症状が現れる前に予防的に使用すべきである。
26.	サリチル酸系解熱鎮痛成分は、ライ症候群の発生が示唆されており、アスピリンは、小児に対しては、いかなる場合も一般用医薬品として使用してはならない。
27.	グアイフェネシンは、粘液成分の含量比を調整して痰の切れを良くする。
28.	プロモバレリル尿素は反復して摂取しても依存を生じることはない。
29.	小児鎮静薬は、夜泣き、ひきつけ、疳の虫等の症状を鎮めるほか、小児における虚弱体質、消化不良などの改善を目的とする医薬品である。
30.	ジプロフィリンは、自律神経系を介して気管支の平滑筋を弛緩させ、気管支を拡張させる。
31.	ポビドンヨードが配合された含嗽薬は、その使用によって銀を含有する歯科材料（義歯等）を変色させることがある。
32.	スコボラミン臭化水素酸塩水和物は、抗ヒスタミン成分と比べて作用の持続時間が長い。
33.	ロクジョウは、シカ科のジャコウジカの雄の麝香腺分泌物を基原とする生薬である。
34.	鉄製剤を服用すると、便が黒くなることもある。
35.	ブソイドエフェドリン塩酸塩は、前立腺肥大による排尿困難の症状がある人では、症状を悪化させるおそれがあり、使用を避ける必要がある。
36.	ベラドンナ総アルカロイドは、鼻腔内の刺激を伝達する交感神経系の働きを抑えることによって、鼻汁分泌やくしゃみを抑えることを目的として配合される。
37.	消化を助け、胃もたれを改善し、胃をすっきりさせる効果を主とする製剤は、食間や就寝前の服用のものが多い。
38.	下痢に伴う腹痛については、基本的に下痢への対処が優先され、胃腸鎮痛鎮痙薬の適用となる症状でない。
39.	パパベリン塩酸塩は、消化管の平滑筋に直接働いて胃腸の痙攣を鎮める作用を示すとされる。
40.	パンテチンは、高密度リポタンパク質（HDL）の異化排泄を促進し、リポタンパクリパーゼ活性を高める作用があ

	る。
41.	アミノ安息香酸エチルは、メトヘモグロビン血症を起こすおそれがあるため、15歳未満の小児への使用は避ける必要がある。
42.	浣腸薬を繰り返し使用すると、直腸の感受性の低下が生じて効果が弱くなる。
43.	痔による肛門部の創傷の治癒を促す効果を期待して、アラントインが配合されている。
44.	一般点眼薬は、涙液成分を補うことを目的とするもので、目の疲れや乾き、コンタクトレンズ装着時の不快感等に用いられる。
45.	一般用医薬品に用いることが出来る漢方処方製剤においては、「しぼり」（使用制限）という漢方の専門用語を使用することを避け、「証」として記載が行われている。
46.	一般用医薬品の点眼薬には、緑内障の症状を改善できるものはない。
47.	カイニン酸は、回虫に痙攣を起こさせる作用を示し、虫体を排便とともに排出させることを目的として用いられる。
48.	イソプロパノールは、ウイルスに対する不活性効果がエタノールよりも高い。
49.	ジクロロイソシアヌル酸ナトリウムは、塩素臭や刺激性、金属腐食性が比較的抑えられており、プール等の大型設備の殺菌・消毒に用いられることが多い。
50.	ネオスチグミンメチル硫酸塩は、目の調節機能を改善する作用を示す

3章 ○×-2 こたえ

番号	解答	解説 (×のみ)
1	○	
2	○	
3	×	カフェインは腎臓におけるナトリウムイオン（同時に水分）の再吸収抑制作用があり、尿量の増加（利尿）をもたらす。
4		次硝酸ビスマスではなく「タンニン酸アルブミン」。
5	○	
6	×	センソが配合された丸薬、錠剤等は、噛み砕くと舌が麻痺することがあるため、「噛まずに服用」する。
7	○	
8	×	…臓器・組織の形態的異常が「なく」… 現れる病態のことである。
9	○	
10	×	メクリジン塩酸塩は、他の抗ヒスタミン成分と比べて作用が現れるのが「遅く」持続時間が「長い」。
11	○	
12	○	
13	×	アラントインは「組織修復成分」である。
14	×	ステロイド性抗炎症成分は、末梢組織の免疫機能を「低下」させる作用を示す。
15	×	高コレステロール改善薬は、やせ薬等の痩身効果を目的とする医薬品ではない。
16	×	記述は殺菌消毒成分の説明になっているが、カルバゾクロムは、「止血成分」。
17	○	
18	○	
19	×	クレゾール石ケン液は、ウイルスに対する殺菌消毒作用は「ない」。細○、真○、結○、ウ× と覚えておこう
20	×	一般用医薬品の点眼薬には、緑内障の症状を改善できるものは「ない」。
21	○	
22	○	
23	×	ビタミンAではなく、「ビタミンD」。
24	○	
25	×	「予防的に」使用することは適切ではない。
26	○	
27	×	記述はカルボシステインの説明になっている。グアイフェネシンは、「気道粘膜からの粘液の分泌を促進する」。
28	×	反復して継続すると、依存を生じることが知られているため注意が必要である。
29	○	
30	×	自律神経系を「介さずに」
31	○	
32	×	スコボラミン臭化水素酸塩水和物は、抗ヒスタミン成分と比べて作用の持続時間が「短い」。
33	×	記述は、「ジャコウ」の内容
34	○	
35	○	
36	×	交感神経系ではなく「副交感神経系」
37	×	「食後」服用のことが多い。
38	○	
39	○	
40	×	高密度リポタンパク質（HDL）ではなく、「低密度リポタンパク質（LDL）」
41	×	15歳未満ではなく「6歳未満」
42	○	
43	○	
44	×	一般点眼薬ではなく、「人工涙液」
45	×	「証」と「しぼり（使用制限）」が逆
46	○	
47	○	
48	×	高いではなく、「低い」

49	<input type="radio"/>	
50	<input type="radio"/>	